

Title	歴史哲學序論(石川三四郎著, 暁書院發行)
Sub Title	
Author	山本, 光郎(Yamamoto, Mitsuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.3 (1933. 8) ,p.188(568)- 191(571)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330800-0188

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のためのものであり、後世の御遷宮と類似が多く、従つて埴輪をもつて墳墓の表飾となす見解はとるべからざるものであると、むしろこれを支那の石人、石馬に原由をもとむべきでなく、むしろ明器に多くの類似を有するが、他方において日本特有の色彩を發揮してゐるとなし、またこれが死者に表獻するものとしてつくられたために形式化が著しく、埴輪家が必ずしも當時の家の忠實なる模寫であるといふことができないから、同様に埴輪人物像の表現にのみ依據して當時の服飾を論ずることの危険であることを警告された。要するに本書は築造年代西紀五六世紀に比定せらるべき、すでに衰頹期に入つた一前方後圓墳の發掘報告書であるが、その埴輪に對する見解は今後の埴輪研究に多くの云唆を與ふるものであつて、最近における考古學界の意義深き成果と言はねばならぬ。(松本芳夫)

歴史哲學序論

(石川三四郎著)
曉書院發行

本書は、序文にも冒頭してゐる如く、歴史學の序論、若しくは總論とも稱されるべきものであつて、いはゞ著者の史觀、若しくは歴史研究方法や態度に對する抱負を披歴せるものと申したい。今本書論述の目次の順に應じて、これを大觀しながらその内容を紹介すると、第一編歴史學總論に於ては、人間的科學(または人道的科學)の提唱者たるエドワード・カーペンターや、クロボトキン、若しくは、獨逸の人格的、個人的科學を主張したるマックス・シュニテイルナーや、又佛蘭西の地理學者にして過激論者た

るエリゼ・ルクリニヤ、若しくは同じく佛蘭西の批判哲學者にして、一種の人格主義を主張したるシャルル・ルヌーヴィエヤ、若しくは獨逸の歴史家エドワード・マイヤーや、若しくは佛蘭西の實證主義者オーギニスト・コント等の史觀と諸説を引例して、著者のいはゆる獨立の學的藝術たる史學(吾々に於て、歴史はそれ自體が一種の藝術である。科學の方式を以て成立する藝術である。故に歴史は巧利的な他の手段たる意義を全然除いても、それ自身に於て、大きな價值と目的とを持つた獨立の學的藝術である(緒論五頁)に對する著者の學的態度を決定してゐる。著者がこゝに引用したるこれらの學者は、申すまでもなくいづれも人類進化の綜合的解説者にして、狭い經驗と、淺い知識を以て、複雑なる人間社會の現象を、簡單なる自然律や、論理の矛盾や、道德律を以て、一方的に解説したのでなかつた。著者の史觀や、學的態度には、かゝる先人の著書の感化が、甚大であると信ずる。殊にカーペンターの人間觀や、エリゼ・ルクリニヤ、シャルル・ルヌーヴィエヤが、本書を通じて、熾烈に反映してゐるやうに思はれる。そしてクロボトキンや、マックス・シュニテイルナーや、エリゼ・ルクリニヤは、何れも、虛無思想家であつた如くに、著者の思想には、明かに虛無的な、コスモポリタニズムの思想が、到る處に反映してゐる。

例へば緒論に於て、「歴史は無常である」といひ、「空の空なるかな、すべて空なり」といひ、「國の東洋と西洋とを問はず、人種の黑白紅黃の別を問はず、いづれの歴史のいづれのページの何れの文字にも諸行無常、有爲轉變の哀音を、響かせぬものはないで

あらう。何れの時代を問はず、如何なる制度政體を問はず、その歴史は必ず榮枯盛衰の暗色に隈どられ、生者必滅の苛法に處せられてゐる」と嘆息される。(緒論一頁、二頁)

併しかくの如く著者は、人類歴史を無常なるものとして、唯だ嘆息し、慨嘆されるかといふに、否、左様でない。著者には、一方に於て、熾烈なる鬭争精神と、眞善美に對する學的、道德的、審美的理想精神が躍如としてひらめいてゐる。而して、その熱誠は、かゝる無常なる、醜惡なる墮落の人類歴史の中にも、恆久不變なる或るものを追求して止まないものである。「諸行無常の中にも有爲轉變の中にも、世界の人類が、常に鬭争を以て、追求して來たものが一つある。時と場所とに従て、名は異り、形は相違するが、それは一語にして言へば、「美」である。そこには人間の無力を示す無常觀よりは、寧ろ人間の意力を察すべき闘ひの生命觀が動いてゐる。「美」を求める生命の動きが見える。醜惡なる世相の中にも、愚劣な物語の中にも、幽かながら人間の美的要求が伺はれるのである」(結論二頁)

而してかゝる著者の歴史哲學を完成する目的として、近代の科學の天才パスタールの細菌學的發見による生命現象の説明を借りて、歴史現象の多様性を説明し、「どんな文化でも、どんな民族でも、どんな國家でも、どんな社會でも、どんな事實でも、多くの原因と要素とが、集合して成立したものである」(同書四八頁)。「要するに、ロシア革命も、明治維新の日本の革命と同様に、内に内在した多くの國と、外から來る多くの縁とが結合して、そこに大結果を齎したものである。それは辯證法的自己發展ではなく

て、内外多様の動因が因果的の法則によつて、結成せられたものであつた(六一頁)。

これと同時に、著者は、歴史動態の多様性につき説明し、ランケや、ヘルデルの説を借りて、人類社會の歴史は、第一に地理的環境の影響を受けて、地方的特色を以て發展する。人類歴史は、第二に各時代の様々な勢力に影響せられて、各時代の特殊性を發揮する」(六三頁)と斷定してゐる。「兎に角、人類の歴史は、各時代に於て、その個性が發揮せられ、各地方に従て、また特殊な個性が表現せられる。従て如何なる地方にても、如何なる時代にも、適用せらるべき普遍的歴史法則といふものは存在しないかも知れない。勿論人類の心理的法則、生理的法則といふやうなもの、諸種の集團生活にも、存在するかも知れない。そしてそれは歴史檢討の一條件となり得ることも想像し得る。併しそれは歴史そのものゝ特殊な法則とは言へない(六四頁)。この點については、ヘンリー・トーマス・バックルの説が最も有力であると思ふのであるが、著者はバックルに就て、一言もしてゐないのを物足りなく思ふものである。

かくの如く著者は、歴史の特殊性と多様性を極力主張してゐるけれども、一方に於て、著者の本來の虛無的、コスモポリタニズムの思想の爲めに、歴史の特殊性の價値が、弱められる點も見受けられる。「地球上の諸民族は、漸く一國の家族たらんとして、却て今躊躇してゐる如くに見える。これより、眞の世界史の第一歩を踏み出さうとしてゐるのではなからうか。特殊な民族の興亡盛衰といふやうなものは、歴史の背後に隠れて眞の「人類」の歴史

がこれから始まるのではなからうか。それには、今日までのイン
タナシヨナリズムなどいふ題目は、最早や生命のないものだ。
これからの吾々の理想を活かすものは、コスモポリタニズムであ
るべきだ」(八〇頁)

こゝにも、著者が序文に冒頭されし如くに、著者のいはゆる獨
立の學的藝術たる史學は、今日のアカデミックの學者とは、大い
にその學的態度を異にすることが解る。著者の史觀に人間味のあ
る點は、確にこの點であらうと思ふ。著者は學者たる前に、先
づ一個の人間である。蓋し人間歴史の研究は血あり、涙ある人間
に非ずして、冷血的なる専門的學者や、哲學者の爲し能はざる
性質のものであるからである。著者は日本の青年者流に多く認め
られる惡趣味的哲學風俗を嘲笑してゐる「日本に於て、今日流行
する哲學風俗は、恐らく近代獨逸の惡風を模倣した結果であらう
が、彼等はたゞ自分の認識、思索、推理を切りこまざき、ねぢ曲
げることをして哲學と心得てゐる。理窟を眞理と誤認し、言葉の
形式を靈知そのものゝ表言と妄信する。哲學者が哲人に非ざる所
以がこゝにある」(序文二頁)

著者は又人間社會に於ける明暗、治亂、生死、興亡、正邪、愛
憎の矛盾撞着は、人間の生理的、又は心理的の無明、錯覺より由
來する疾病狀態であるから、歴史現象を検討するには、社會病理
的考察が必要であると主張するのである。而して、この場合、病
源は何處に存するかといへば、著者は、ウイルヒョウの細胞病理
學說を借りて、單なる機構の問題でなくして、機構を組織する細
胞の問題であるといつてゐる。即ち社會を構成する個人の問題で

あるといふのである。「各個人の覺醒の度は、その時代の自由と健
全との尺度である」(九五頁)「吾々が歴史上の社會現象を批判す
る場合には、それ故に社會の機構の變遷のみを見たのでは、眞實
を把握することはできない。吾々は各時代の個人生活を検討し、
その社會機構に對する心理的交渉を明確に知る必要がある。それ
がためには、各時代の文學を精査することが最も必要である」(九
六頁)こゝにも著者は、歴史現象に於ける個人的作用を重視して
ゐることが解る。

著者は又歴史の特殊的概念は、社會の各時代の特性に應合する
ものであつて、神政制度には、それに附隨した歴史家が存して獨
自の方式で事物を觀たり、人物を批判し、君主制度には又その著
作家があり、歴史の教授法が強權的、專制的性質を保有するもの
であることを警告し、歴史家の公平なる批評精神を喚起してゐる。

第二編進化思想、及び進歩思想に於ては、先づ近代の社會主義、
殊に科學的社會主義の基調を爲すダーウインの進化論やスベンサ
ーの社會進化説の生存競争、自然淘汰、適者生存の原則が、如何
に社會道徳に惡影響を及ぼしたるかを指摘すると共に、かゝる進
化論に對する幾多の反對説や、異説を紹介して進化論に對する幾
多の難題と疑問を提出してゐる。而してかゝる進化論を普及せし
めたるものは、文藝復興後の近代の進歩思想であると述べ、十八
世紀以後になつて盛になつた佛蘭西を初め、英獨の代表的進歩論
者を列記して、幾多の進歩論説を紹介してゐる。そしてかくの如
く進歩思想は、随分多種多様であるが、進歩の語によつて、考へ
る事實は、大抵大同小異であることを指摘し、その例證として、

歴史家ギボンの説を引用してゐる。「世界歴史の開闢以來、各時代は人類の富や、幸福や、科學や、又恐らくは道德をも増進した。そして尙ほ増進する」

私は著者のかゝる進歩論をくどく紹介する代りに、歴史家フリーマンの言を引用しよう。「歴史に於ける進歩のあらゆる階段は、同じく又退歩の一階段である」。凡そ進歩論を、論ぜんとするならば、この難解を突破しなくてはならぬであらう。

而して最後の第三編史的階級闘争論、及び辨證法的唯物史觀の批評に於ては、先づマルクス、エンゲルスの共產黨宣言の階級闘争の歴史の淵源に就き考察し、それは佛蘭西革命當時のペペウフヤ、ルソーの自由平等の宣言にあるとなし、そしてそれは社會的惡たる不平等の結果より到來したるものであることを指摘した。かくして、スペンサー流の機械的社會進化論に基礎をおいた科學的社會主義者と自稱するマルクスや、エンゲルスの辨證法的唯物史觀を、忌憚なく批判し、論駁してゐる。

讀後の記憶を十分整理し難いが以上で大體本書の内容の概要を紹介したと思ふ。さて本書各篇の論文は、新規に執筆したものもあるらしいが、舊稿を増補修正したものも多いやうで、可なり重復してゐる點もある。併し大體に於て、著者の精神が一貫してゐることは、甚だ慶賀すべきことである。終りに著者の熱誠なる研究態度に謹んで敬意を表すると共に、著者が本書の序文に豫告されたる大抱負と計畫を近き將來に成就されて、讀者の机上に送られる日を待望する。(昭和八年七月四日山本光郎)

明治以後の歴史學の發達(歴史教育研究會編輯) 四海書房發行

我が國の歴史學も、明治維新から六十餘年、近代史學を受け入れてから既に四十餘年を経て居り、量的にも質的にも大なる發達をなした。人なら、そろ／＼傳記が出てよい年配である。されば我が國の史學にしても、維新以後に發達して來た史學の業績を綜合的に、全一的に取纏めた書物の存在を必要とするであらう。それは既に古くからこの學に關係し、寄與せられた人達にとつてはこよなき過去帳となり、今後の研究の糧ともなるであらうし、まだ斯學にたづさはつて間もない者やこれから入らうとする人々へは、進學の行路を指示する道標となり、足場ともなるからである。いはゞ歴史學それ自身の發達のために、この種の書物は永く缺けてゐるべきものでない。然るにそれを今日まで吾々は持つてゐなかつたが、幸に今本書が世に出て來て、渴望の幾分かを醫してくれることになつたのは、大なる喜びである。

本書は昨年雜誌「研究評論歴史教育」の増刊號として一度出たものを、そのまま改装して市場に送られた、所謂「量的に時間的に越えられない限界」を持つて生れた單行書であるが、流石に數多名家を煩して出來たものだけあつて、單にその構成と一部の内容を拜見したゞけでも、この方面に於ける開拓者としての位置を許されてもよい性質の書物と思はれる。

本書の構成を見ると、三上參次博士の「史學發達今昔の感」を序文として、その次に文化史學、國史學、東洋史學及び西洋史學